

疑似クラス

リンクの状態に合わせた指定をする際に、`:link`, `:visited`, `:hover`, `:active` といったセレクタを使用しました。このように、要素が特定の状態にあるときに限定して適用するセレクタのことを「疑似クラス」と言います。CSS3ではこの疑似クラスが数多く用意されているのですが、ここではその中の一部を紹介しておきます。

- `:first-child`

その要素が、要素内容の中で最初の要素（親要素から見て「最初の子要素」）となっている場合に適用対象とする疑似クラスです。

- `:last-child`

その要素が、要素内容の中で最後の要素（親要素から見て「最後の子要素」）となっている場合に適用対象とする疑似クラスです。

- `:nth-child(式)`

()内に書き込む「 $a+n$ 」という形式の式に応じて、「 b 個目から a 個おき」に該当する要素を適用対象とする疑似クラスです。式の a と b には任意の整数（0もマイナスも可）を指定し、 n はそのままで「0から1ずつ増える整数」をあらわします。たとえば、`:nth-child(2n+1)`と指定すると、「 $2 \times 0 + 1 = 1$ 」「 $2 \times 1 + 1 = 3$ 」「 $2 \times 2 + 1 = 5$ 」というように奇数個目（1個目から2個おき）に適用されることになります。`:nth-child(2n+0)`と指定すると、「 $2 \times 0 + 0 = 0$ 」「 $2 \times 1 + 0 = 2$ 」「 $2 \times 2 + 0 = 4$ 」というように偶数個目（0個目から2個おき）に適用されます。この場合の $2n+0$ は b の部分を省略して $2n$ と書くこともでき、逆に a の部分を省略して b だけで指定することも可能です。たとえば、`:nth-child(5)`と指定すると、5番目の要素だけに適用されます。また、奇数をあらわすキーワード「`odd`」と偶数をあらわすキーワード「`even`」も用意されており、奇数個目だけに適用したければ `:nth-child(odd)`、偶数個目だけに適用したければ `:nth-child(even)`と指定することもできます。

セレクタの結合子

セレクタを半角スペースで区切って2つ配置すると、「左側のセレクタに該当する要素の中に含まれる、右側のセレクタに該当する要素」に適用されることは既に説明しました。これと同様に、2つのセレクタを「`>`」記号で区切ると、「左側のセレクタに該当する要素の直接の子要素である右側のセレクタに該当する要素」に対して適用されます。たとえば、下の例のように指定すると、「header要素の子要素であるul要素」だけが適用対象となり、「footer要素の子要素であるul要素」は適用対象外となります。

```
header > ul { ... }
```

適用先を複数指定する

複数の適用先に同じ表示指定を適用させたい場合には、それぞれの適用先をカンマで区切って指定します。たとえば、下の例のように指定すると、「h1要素」と「p要素」と「id属性の値に"top"が指定されている要素」と「nav要素の中に含まれているli要素」の文字色が赤になります。

```
h1, p, #top, nav li { color: red; }
```